

宗教と学問 (3) : それでも宗教

末本文美士

1、〈人間〉＝倫理の限界：清沢満之（1863—1903）の問題提起

近代日本思想史上の明治 30 年代

- 1889 (明治 22) 大日本帝国憲法
- 1890 (23) 教育勅語
- 1891 (24) 内村鑑三不敬事件、久米邦武事件
- 1893 (26) 井上哲次郎『教育ト宗教ノ衝突』
- 1894 (27) 日清戦争
- 1901 (34) 田中智学『宗門之維新』、高山樗牛「美的生活を論ず」、
清沢、『精神界』発刊（精神主義の宣言）
村上専精『仏教統一論』大綱論（大乘非仏説論）
- 1902 (35) 樗牛「日蓮上人とは如何なる人ぞ」、樗牛没
- 1903 (36) 清沢没、藤村操自殺、岡倉天心『東洋の理想』
- 1904 (37) 日露戦争、綱島梁川の見神の実験（翌年発表）、岡倉天心『日本の覚醒』

時代状況： 政治の季節（社会）→宗教の季節（個人の内面）

政治運動への弾圧、日本主義・国粹主義の台頭、道徳の強制

社会的成熟→主体としての近代的「個」の必要

井上哲次郎のキリスト教批判（『教育ト宗教ノ衝突』）

- 第一、国家を主とせず。
- 第二、忠孝を重んぜず。
- 第三、重きを出世間に置いて世間を軽んず。
- 第四、其博愛は墨子の兼愛の如く、無差別的の愛なり。

清沢における宗教と倫理

主観主義、内面主義——内面を通して他者へ

精神主義は自家の精神内に充足を求むるものなり、故に外物を追ひ他人に従ひて、為に煩悶憂苦することなし（「精神主義」）

宗教は主観的事実なり（同）

道徳から宗教へ——無限責任→無責任

所謂人倫道徳の教より出づる所の義務のみにても、之を実行することは決して容易のことでない。若し真面目に之を遂行せんとせば、終に「不可能」の嘆に帰するより外なきことである。私は此の「不可能」に衝き当りて、非常なる苦みを致しました。…私は無限大悲の如来を信することによりて、今日の安楽と平穩とを得て居ることであります。無限大悲の如来は、如何にして、私に此平安を得しめたまふか、外ではな

い、一切の責任を引受けてくださるゝことによりて、私を救済したまうことである。
〔我信念〕

宗教の立場

無限大悲が吾人の精神上に現じて、介抱を命じたまはゞ、吾人は之を介抱し、通過を命じたまはゞ、吾人之を通過するなり。〔精神主義と他力〕

道德→宗教→道德

真面目に宗教的天地に入らうと思う人ならば、……親も捨てねばなりませぬ、妻子も捨てねばなりませぬ、財産も捨てねばなりませぬ、国家も捨てねばなりませぬ。進んでは自分其物も捨てねばなりませぬ。語を換えて云へば、宗教的天地に入らうと思ふ人は、形而下の孝行心も、愛国心も捨てねばならぬ。其他仁義も、道德も、科学も、哲学も一切眼にかけぬやうになり、茲に始めて、宗教的信念の広大な天地が開かるゝのである。〔宗教的信念の必須条件〕

一度如来の慈光に接してみれば厭ふべき物もなければ、嫌ふべき事もなく、……国に事ある時は銃を肩にして戦争に出かけるもよい、孝行もよい、愛国もよい。(同)

宗教と道德

宗教と道德の区別が明かでありて宗教者は宗教の分を守り、道德家は道德の分を守りて各其能を尽せば各其功績を国家社会に貢献することである。〔宗教的道德（俗諦）と普通道德の交渉〕

2、他者と死者

〈人間〉と他者

死と死者

近代哲学の誤り——死を哲学の範囲から追い出す＝経験不能のもの

「死」は経験できなくても、「死者」は経験的事実

身近な死者

戦争の死者——ヤスクニ、ヒロシマ・ナガサキ

他者としての死者

田辺元（1885—1962）の「死の哲学」

種の哲学→懺悔道としての哲学→死の哲学

死者との実存協同

『碧巖録』第55則・道吾一家弔慰

生死の問題に熱中する若年の僧漸源が、師僧の道吾に随つて一檀家の不幸を弔慰したとき、棺を拍つて師に「生か死か」と問ふ、しかし師はただ「生ともいはじ死ともいはじ」と言ふのみであつた。……そののち道吾他界するに及び、漸源は兄弟子にあたる石霜に事のいきさつを語つたところ、石霜もまた不道不道（いはじいはじ）といふのみであつた。漸源ここに至つて始めて、……先師道吾が自分の問に答へなかつたの

は、彼をしてこの理を自ら悟らしめるための慈悲であり、その慈悲いま現に彼にはたらく以上は、道吾はその死に拘らず彼に対し復活して彼の内に生きるものなることを自覚し、懺悔感謝の業に出でたといふのである。（「メメント・モリ」）

自己のかくあらんことを生前に希つて居た死者の、生者にとってその死後にまで不断に新にせられる愛が、死者に対する生者の愛を媒介にして絶えずはたらき、愛の交互的な実存協同として、死復活を行ぜしめるのである。（「生の存在論か死の弁証法か」）師の愛を通じて自ら真実を悟得した弟子は、それに感謝する限り、当然に、自ら悟り得た真実を報謝して、更に新しく他人に回施し、彼をして彼自身の真実を自悟せしめるための媒介としなければならぬ。（「メメント・モリ」）

『法華経』における他者と死者

第一部——菩薩とは？

「一切衆生は菩薩である」＝「あらゆる人は他者と関わっている」

初期仏教の倫理——他者を必要としない

大乘仏教——慈悲の原理、六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧）

声聞成仏

第二部——死者としての仏

死者の出現＝見宝塔品

如来寿量品——久遠実成の仏

《もととなる拙著・拙稿》

末木文美士『明治思想家論』（トランスビュー、2004）

『近代日本と仏教』（トランスビュー、2004）

「〈人間〉の言葉、死者の言葉」（『日本の哲学』4、2003）

「〈死者〉の発見——田辺元の〈死の哲学〉をめぐって」（『日本の哲学』6、2005）

「ヤスクニ——いかに議論の地平を作れるか」（『福神』11、2006）